ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の位置づけ

中村直子
鹿児島大学

NAKAMURA Naoko
Kagoshima University

はじめに

ナガラ原東貝塚では、成川式土器が出土している。成川式土器とは南九州本土地域を中心として分布する古墳時代から古代初頭の土器様式の総称である（中村1987他）。沖縄本島付近での出土例は少なく、当該期の地域間交流を考える上でも重要な資料である。本論では、成川式土器の概要とナガラ原東貝塚から出土した成川式土器の位置づけについて考察する。

1．成川式土器の概要

1.1. 先行研究による編年とその問題点

成川式土器は、鹿児島県指宿市成川遺跡を標識遺跡とする。成川遺跡出土遺物のうち、河口・乙益（1973）の第四類が成川式土器と設定されている。鉄器や土師器系土器も共伴していることから、成川式土器には時期幅があるとの認識が当初からもたれていた。

1980年代には、成川式土器の細分案が次々に出され（池畑1980、多々良1981）、それらの先行研究を基に、中村（1987）では、弥生時代後期から古墳時代の土器を松木薗式・高付式[1]（弥生時代後期）→中津野式（弥生時代終末期）→東原式（古墳時代前期）→辻堂原式（古墳時代中期）→笹貫式（古墳時代後期以降）に細分した（図１）。また、弥生時代後期には薩摩半島西部と大隅半島を中心に東西に分かれて分布する２系統の様式が、次の中津野式（弥生時代終末期）にはその類似度が増し、南九州本土地域全体に同一様式が分布する

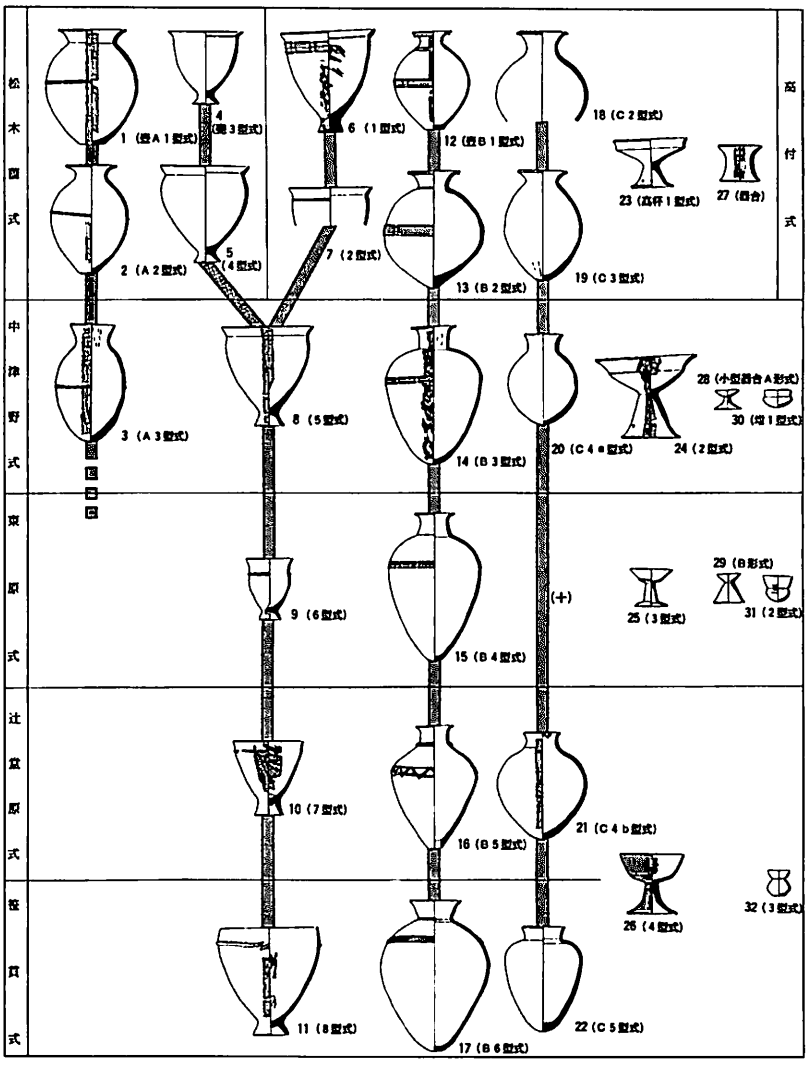

図１　成川式土器の中村（1987）編年

と位置づけた。

その後、資料増加に伴って中村（2002）では、鹿児島県本土域を北薩地方、薩摩半島・鹿児島湾岸地域、肝属平野部の３地域に分類し、地域別の遺構内共伴資料による編年を試みた。古墳時代前期後半以降の土器編年を１～４期に細分したが、１期は中村（1987）編年の東原式後半、２期は辻堂原式、３・４期は笹貫式にあたる。しかし、各地域の資料が満遍なくそろっている状況ではなかったため、地域ごとの編年を体系的に示すことはできなかった。

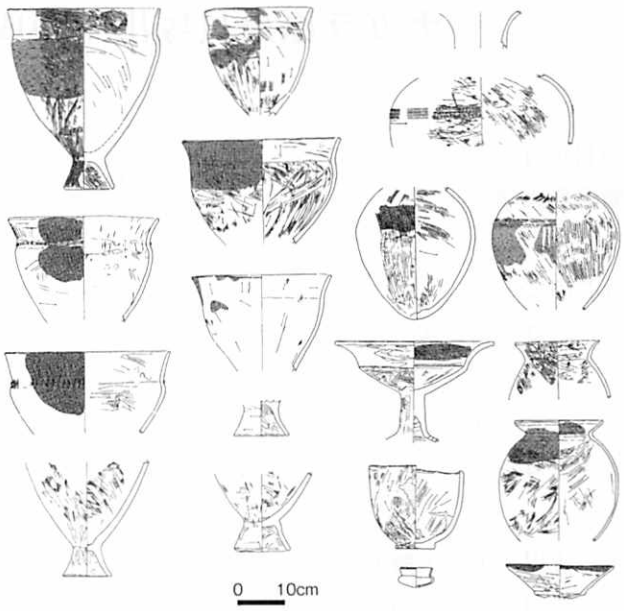

図２　清水前遺跡土器溜り遺構出土土器

成川式土器の下限年代については、須恵器との共伴関係から６世紀から７世紀初頭に位置づける説（多々良 *ibid.*・中村 *ibid.*）があったが、指宿市橋牟礼川遺跡における笹貫式土器と開聞岳噴出物との層位的検討から、少なくとも指宿地方では７世紀後半期以降まで下るとの見解が出された（下山1995）。７・８世紀の須恵器との共伴資料の増加もあり、現在では７世紀末もしくは8世紀中ごろまで存続する可能性が指摘されている（中村2002・2009、吉本2006）。なお、橋牟礼川遺跡では、７世紀後半と874年に噴出した開門岳火山灰にはさまれた層から、須恵器や土師器の食膳具や甕とともに、笹貫式土器甕の特徴を持った土器が出土しており、指宿地方では８世紀から９世紀に食膳具を中心に土師器化が進んだ状況を示している（下山 *ibid.*）。

現在、中村（1987）の編年案がよく使用されているが、発表後25年以上を経過し、他地域との並行関係をとる上でも、地域や時間軸の細分をはじめとした再検討が必要とされている。例えば、南さつま市清水前遺跡では、土器溜り遺構で布留式系土器が出土しているが（上東他　2011）、共伴する在地土器は、甕のゆるく屈曲した口縁部形態、壺のプロポーションや丸底の底部形態、在地化した小型丸底壺の存在など（図２）、東原式土器の特徴をより供えていると考える。しかし、甕の細身の脚台や胴部下半部の底部へ向かって逆三角形状にすぼまる器形は中津野式によく見られる特徴であり、古い属性を残しているといえる[(2)]。そのため、中村（1987）編年での定義に照らすと、中津野式・東原式どちらにも比定できる。成川式土器様式内の相対的な新旧関係に大きな変更点はないと考えているが、各時期に広域的な並行関係の把握が困難な状況が生じており、編年の再検討は急務であるといえる。

1.2.　使用状況からみた祭祀具・調理具・食器としての成川式土器

1.2.1.　系統別にみる器種組成とその変遷

成川式土器の主要な器種は、大壺・甕・壺・高杯・小型丸底壺もしくは坩・台付鉢・鉢である。図３は中津野式・東原式を古墳時代前半期、辻堂原式・笹貫式（古段階）[(3)]を古墳時代後半期として系統別に器種組成の変遷を示したものである。前半期の主要な器種を系統別に見ると、南九州弥生土器の系譜を引く大壺・甕、南九州以外の九州弥生土器の系譜を引く高杯・直口壺[(4)]、古式土師器系の小型丸底壺がある。小型丸底壺を大型化した壺など、外来系土器を変容し、在地化した型式や器種も存在する。一般的に他の土器様式とは排他的な関係にあるとされている成川式土器だが、食器を中

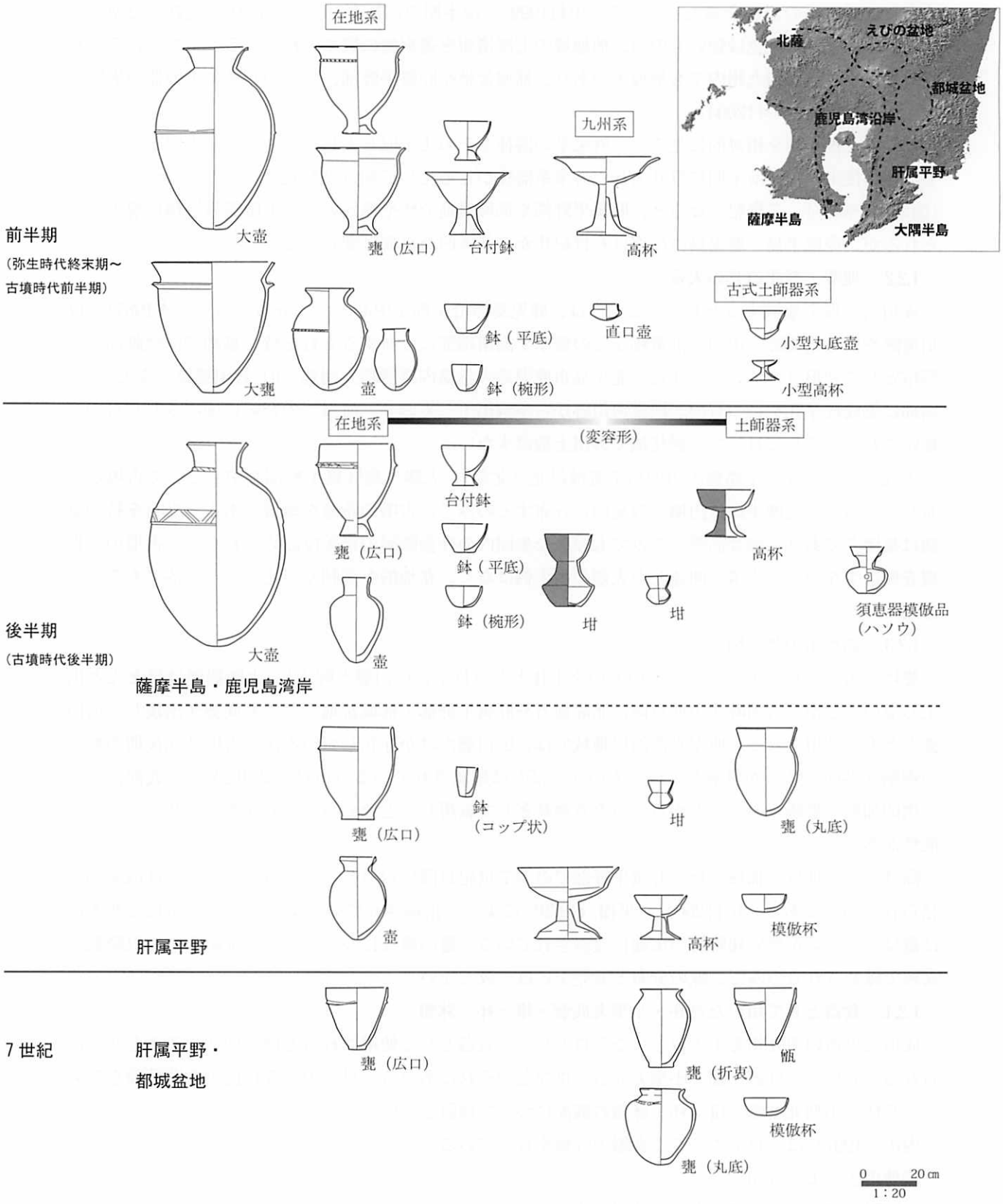

図３　成川式土器の器種組成とその変遷（模式図）

古墳時代前半期は中津野式と東原式を、後半期は辻堂原式・笹貫式の器種組成を模式化した

心として外来系の器種を導入している（中村1999）。後半期の高杯も、土師器高杯と連動した型式変化をするなど、地域色は強いものの、他地域の土器情報を選択的に取り入れている。ただし、その頻度や取り入れ方は南九州内でも地域差があり、都城盆地や肝属平野部、えびの盆地に土師器の影響が強い（相美2004、中村2004）。

前半期と後半期を相対的に見ると、外来系の器種をそのまま取り入れているのは前半期がより顕著である。後半期は、前半期に取り入れた外来系器種が在地化して独自の型式変化したものが見られる（図３坩や高杯）。７世紀になると、肝属平野部や都城盆地で杯や甑といった土師器系器種の導入が見られるが、薩摩半島・鹿児島湾岸部は６世紀代から基本的な組成は変わらない。

1.2.2. 埋葬・祭祀道具の大壺

成川式土器を象徴するともいえる大壺は、鹿児島湾沿岸部を中心として分布する（吉本1987）。成川遺跡や松之尾遺跡、南摺ヶ浜遺跡などの薩摩半島南端部に分布する立石を持つ墓制では供献品や土器棺として使用されている。また、鹿児島市鹿児島大学構内遺跡郡元団地（旧 釘田遺跡）などでは、胴部に焼成後穿孔を持つものが埋没河川跡から多数出土しており、河川での祭祀に使用されたものと推定される。それに対して、居住域での出土数は少ない。

南九州では、薩摩半島側の川内川下流域以北（北薩）、大隅半島肝属平野部を中心として古墳が分布しているが、薩摩半島は円墳が散発的に分布するのみで、古墳の希薄な地域である。立石を持つ墓制は集団墓であり、副葬品等からみても顕著な集団内の社会階層の格差は認められない。古墳の発掘調査例は少ないが、古墳に関連した大壺の出土例はなく、在地的な墓制や祭祀に伴う土器であろうと考えられる。

1.2.3. 調理用の甕・甑

甕は、広口で脚台もしくは平底のものを主体とし（以下、広口甕と呼ぶ）、土師器甕はほとんど出土しない。しかし古墳時代中期以降、北薩地方や肝属平野部・都城盆地などで丸底甕が出現し、広口甕とともに使用される。鹿児島湾沿岸地域では、広口甕だけが存在しているが、古墳時代後期の無文の壺胴部外面にススが付着しているものがしばしば確認されている（中村・新里2005）。底部付近に二次的加熱の痕跡があることから、壺を煮沸具として転用したと考えられ、丸底甕の代替品である可能性がある。

甑はえびの地域・都城盆地・肝属平野部でのみ７世紀以降に定着し、それ以外の地域には散発的に見られるのみである（中村2004）。平田（1979）によって指摘されているように、南九州には基本的に竈はなく、炉が竪穴建物跡の床面に設置されている。竈の導入については、７世紀中ごろ以降都城盆地で確認されるのみで、甑の分布とも完全には一致しない。

1.2.4. 食器として用いた高杯・小型丸底壺・坩・杯・鉢類

成川式土器の南九州弥生土器と異なる点として、食器として使用される器種が増加することがあげられる。高杯・台付鉢・鉢・小型丸底壺・坩などがそれにあたる。以下内山敏行氏の食器分類を参考に、高杯、小型丸底壺、坩、杯、鉢類の機能について検討したい。

内山（1997）は、以下のような食器の分類を行っている。

①使用法による分類

「手持食器」：手で持ち上げて使用する

「置食器」：置いたままそこから手、あるいは箸で食物をとる

②飲食物による分類

「食用器」：固形物用

「飲用器」：液体または流動性食品用

「飲食兼用器」：どちらも兼ねる

③食器を使用する人数

「銘々器」：個々人が使用

「共用器」：複数人数が共同使用

南九州では弥生時代前期から高杯が存在するが、ごく少量で、様式内に定着するのは中津野式期以降である。高杯は食用の置食器であると位置づけられるが、口径が30cm 前後の大型と、15cm 前後の小形がある。大型高杯は共用器である一方、小型高杯は、銘々器であると考えられるが、出土量は少ない。台付鉢・鉢は、その形態から、広口で脚台を持つもの（台付鉢）、広口で平底のもの（平底鉢）・椀状で丸底のもの（椀形鉢）、コップ状のもの（コップ状鉢）に分類することができる。台付鉢は置食器、他は口径が10～15cm 前後と小さく・手持食器であると考えられる。小型丸底壺も同様である。また、コップ状鉢は飲用器、平底鉢・椀形鉢・直口壺・小型丸底壺は広口で浅めの器形から、食飲兼用器と位置づける。

坩は頸部がしまっているため、飲用器であると考えられるが、大型のものと小型ものがあり、前者は共用で置いてつぎ分けるか、まわし飲みをしていたもの、後者は銘々器として使用したものと推定する。

前半期の食器は、大型の置食器と小型の手持食器を中心として構成される。一方、後半期では肝属平野部と薩摩半島・鹿児島湾岸部に若干の差異がみられる。薩摩・鹿児島湾岸部では、銘々器である中型の置食器と、小型の手持食器、大型飲用器と小型飲用器をセットとしている。肝属平野部では、大型で共用の置食器、銘々器の置食器と手持食器で構成されている。薩摩半島・鹿児島湾岸部では大型の飲用器が発達し、肝属平野部では共用器としての大型の高杯が後半期まで残るという違いがある。

一般的に弥生時代から食器は、高杯を主体とする置食器と飲用の手持食器で構成されていた。それが古墳時代の中期に手持食用器・手持飲食兼用器の須恵器の杯身が登場し、食器使用法が「置いた高杯から手で取り、飲用器は手で持つ」から「飲食ともに手持ち食器を使う」方式に変換している。これは高杯が減り、杯が増えることに表れており、６世紀以降には高杯が祭祀道具としてのみ残る。

これに対し、南九州では古墳時代後半期になって銘々器としての高杯が定着する段階をむかえ、「置いた高杯から手で取り、飲用器は手で持つ」食事様式を続ける。手持飲食兼用食器主体に変化するのは、肝属平野部・都城盆地・えびの盆地では７世紀中ごろ以降、薩摩半島・鹿児島湾岸部は律令土師器に転換する８世紀中ごろ以降であると推定している。

1.2.5. ミニチュア土器と杓子形土製品

成川式土器に伴うものとして、ミニチュア土器と杓子形土製品がある（図４）。ミニチュア土器は弥生時代からあり、ほとんどが手づくねによって作られ、ユビオサエ痕など明瞭に残るものが多い。鉢状のものが多いが、一部には甕形や壺形を呈するも

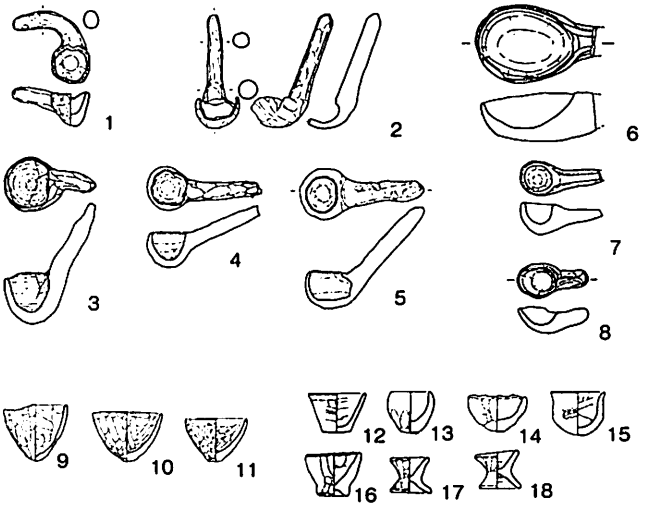

図４　杓子形土製品とミニチュア土器

1・2　上水流遺跡　6～8　麦之浦遺跡　5　松尾平遺跡　3・4　西船子遺跡　9～10　武Ｈ遺跡　12～18　古原遺跡

のも認められる。住居跡など居住域やその周辺からの出土例が多い。

杓子形土製品については、他地域では古墳時代前期段階でほとんど消滅するのに対し、南九州では弥生時代後期から笹貫式期まで存続する。ミニチュア土器同様、住居跡や居住域周辺で出土することが多く、粗雑な作りである。実用品としては使用するには小さく、器壁が厚いため、使用には耐えないと判断され、やはり祭祀具であろうと推定される（中村 2009）。

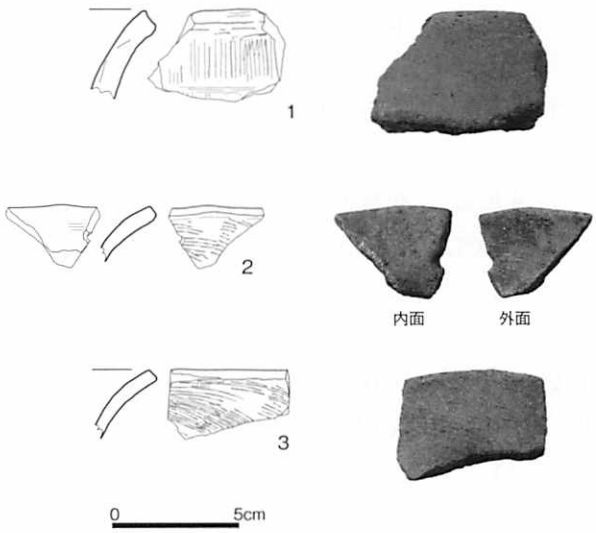

図５　ナガラ原東貝塚出土の成川式土器（S=1/3）
1：東原式？の甕口縁部、2・3：成川式としても違和感はない。高杯か？

２．ナガラ原東貝塚出土の成川式土器の意義

2.1.　ナガラ原貝塚出土の成川式土器について

ナガラ原東貝塚から出土した成川式土器は、甕の口縁部（図５-１）であると推定される。外反する口縁部で口唇部は強いヨコナデのため端部がＭ字状にくぼんでいる。残存部は少ないながら、復元すると口径32cm 前後となる。外面にはタテ方向のハケメが認められ、口唇部直下外面にハケ工具の圧痕が横位に並んで残存している特徴が、中津野式から辻堂原式の甕口縁部に見られる「カキアゲ」技法による特徴と共通している。口唇部を強くＭ字状にくぼませている点や、端部から屈曲部付近まで厚さが一定している特徴から、「東原式」の可能性が最も高いと考えられ、古墳時代前期から中期前半のものであると思われる。

なお、高杯もしくは精製鉢の口縁部と推定される破片も出土している（図５-２・３）。大きく外反する口縁部形態で、これも残存部は少ないが、復元口径が約20cm と推定される。器壁が薄く、弥生時代終末期から古墳時代中期の範疇のものであると推定される。この土器の産地は特定できないが、成川式土器としてみても、違和感のない質感を有している。

2.2　琉球列島出土の成川式土器

沖縄諸島では南九州産の弥生土器は多数出土しており、これまで安座間（2000・2002）、中園（2000）、新里（2000）、宮城・安座間（2002）等の研究によって、詳しく論じられている。それらによると弥生時代中期に搬入量のピークを迎え、弥生時代後期以降急速に減少する。器種をみると、中期前半までは甕形土器が多いのに対し、中期後半は壺形土器が増加する。後期に南九州を含む九州産土器が減少すると同時に奄美産と考えられている「弥生系土器」の甕が増加する傾向にある。九州弥生土器の搬入は、「南海産貝輪交易」（木下1996）が契機となっていると考えられており、南九州産土器の、煮沸用甕から貯蔵用壺への変化が、南九州人の交易への関わり方の変化を示しているとも推定されている。

ただし、弥生時代後期以降の九州産搬入土器は著しく減少する。沖縄本島付近で出土が確認されたのは、高知口原貝塚・中川原貝塚（仲宗根他2001）・具志川グスク崖下遺跡・宇堅貝塚（金武他1980）・平屋敷トウバル遺跡（島袋他1996）・伊江島具志原貝塚（安里他　1985）などである。これらのうち、時期の詳細がある程度わかるものは、免田式長頸壺や九州産の壺底部であるが、いずれも弥生時代後期から弥生時代終末期までのものが多い。交易品のコンテナとして持ち込まれた可能性が高いが、具志川グスク崖下遺跡出土の大壺は、肩部に円形浮文が付き、胎土・調整を見ても精製器種で

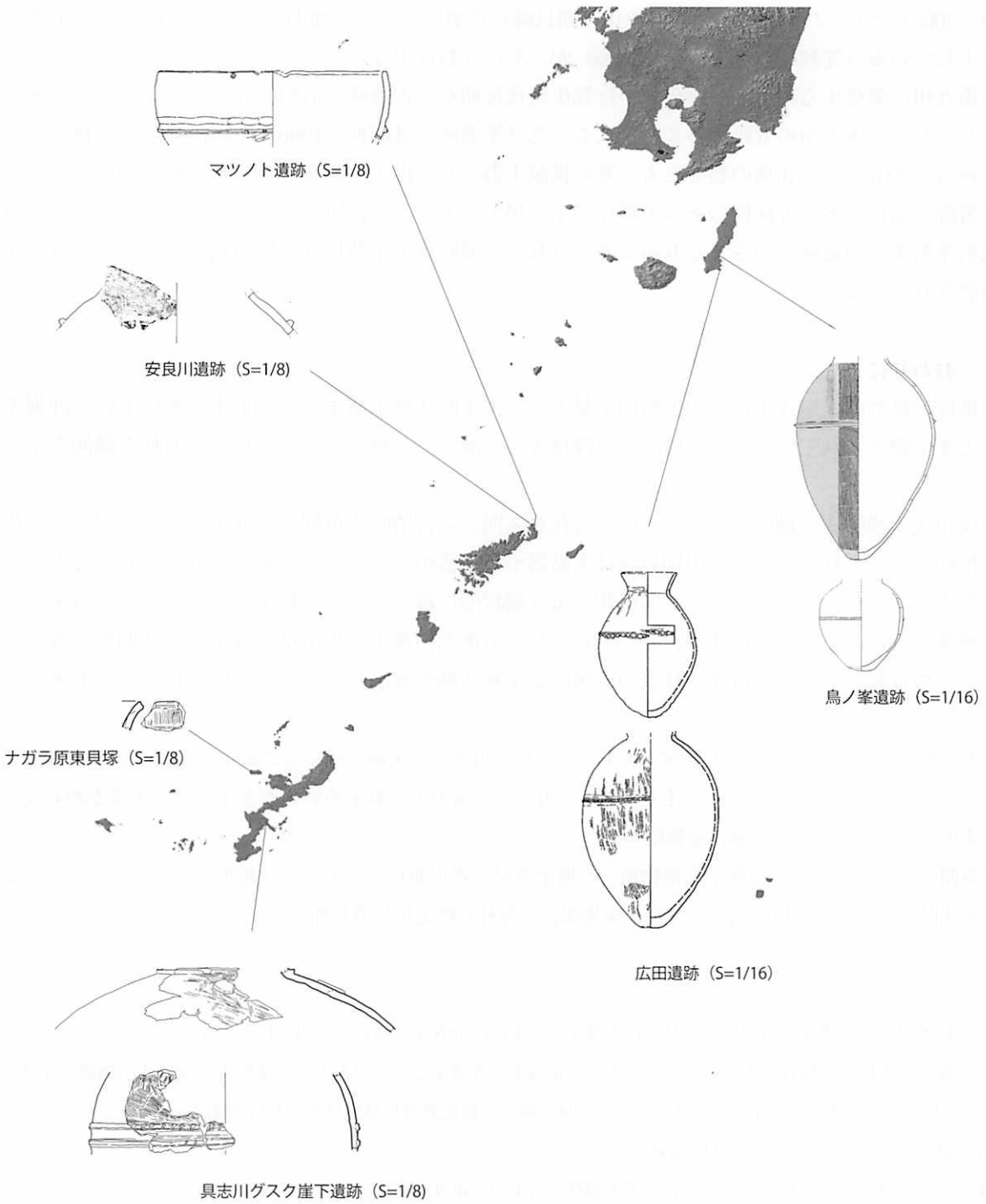

図6　琉球列島出土の成川式土器

あるといえる。埋葬遺跡である指宿市南摺ヶ浜遺跡で類似の土器が出土している（久保田・辻2009）。大壺は祭祀具であると考えられ、壺自体に重量があることから、コンテナとして搬入されたとは想定しにくく、土器自体が交易品として持ち込まれたものと推定する。

弥生時代終末並行期までの状況に対し、ナガラ原東貝塚では甕や高杯（もしくは鉢）が持ち込まれている可能性がある。土器が小片のため確実な類例を待って解釈したいが、甕や高杯であると仮定すれば、これもコンテナとしては適さないため、搬入者の移動中の生活道具として持ち込まれた可能性も指摘したい。ちなみに、奄美大島では安良川遺跡で古墳時代のものと考えられる壺の破片が（中山

他　2005)、マツノト遺跡では古墳時代後期以降に位置づけられる笹貫式土器甕の口縁部が1点ずつ出土している（笠利町教育委員会　2006）が、やはり数は少ない。

南九州に隣接する種子島・屋久島では弥生時代後期から古墳時代前期の九州系の壺形土器が多く出土しており、南九州のものも多く含まれる。鳥ノ峯遺跡（盛園他　1996）や広田遺跡（南種子町教育委員会　2007）では在地の甕とともに墓の供献土器として出土しているが、甕の搬入例はない。一ノ坪遺跡で高杯である可能性のある土器片が1点出土している（徳田・石堂　2009）が、これも古墳時代前半期までの範疇におさまるものと考えられ、古墳時代後半期以降の成川式土器については、まだ確認されていない。

3．おわりに

琉球列島での成川式土器の出土傾向を見ると、弥生時代終末期までは壺形土器を中心に、沖縄本島付近まで搬入されているが、古墳時代以降は著しく減少し、種子島・屋久島でも同様な動向を示している。

成川式土器様式の動態をみると、弥生時代終末期から古墳時代前期には外来土器の情報をある程度直接的に取り入れているが、中期以降は土師器や須恵器のデザインを変形して取り入れるなどの独自の型式変化するものが多く、外来の情報をより選択的に導入している様子がうかがえる。外来土器の情報量が少なくなった可能性もあり、琉球列島での南九州産土器出土量の減少とも時期が一致している。この背景としては、南九州社会の広域的な交易活動が縮小している可能性も指摘しておきたい。

本論をまとめるにあたり、土肥直美先生には、具志川グスク遺跡についてご教授いただき、資料調査について多大なご協力を賜りました。また、以下の方々にご協力・ご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。
安座間奈緒、安座間充、沖縄県立博物館、片桐千亜紀、寒川朋枝、新里亮人、新里貴之、仲宗根求、株式会社文化財サービス、宮城弘樹、山野ケン陽次郎、読谷村立歴史民俗資料館

注

（1）松木薗式は薩摩半島西部を、高付式は大隅半島を中心に分布する様式で、両者は並行する。

（2）東原式古段階の属性である可能性とともに、地域差も考慮する必要がある。中津野式～東原式の甕脚台を比較すると、清水前遺跡の所在する薩摩半島西部地域が細く、鹿児島湾岸地域は太い傾向がある。

（3）笹貫式（古段階）とは、中村（2009）による。

（4）ここでは、橿（2011）の「九州在来系土器群」の中で、南九州在地土器以外のものを指す。

文献

安里嗣淳・岸本義彦・盛本勲・玉城朝健　1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県教育委員会
安座間充 2000「琉球弧からみた弥生時代併行期の九州との交流様相－当該期搬入土器群及び弥生系土器の再検証を中心に－」『地域文化論叢』第3号　pp. 1～46　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
池畑耕一　1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号　pp.1～41　鹿児島県考古学会
上東克彦・福永裕暁・下大田好江　2011『清水前遺跡』鹿児島県南さつま市教育委員会
内山敏行　1996「手持食器考一日本的食器使用法の成立－」『Hominids』1　pp.21～47　CRA
笠利町教育委員会編　2006『マツノト遺跡』笠利町教育委員会

鎌田浩平　2006「古墳時代指宿地方における土器の様相」『Archaeology from the South』pp.135～150　鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会

河口貞徳・乙益重隆1973　「第４章　出土遺物　第1節　土器」pp.55～108『成川遺跡』文化庁

木下尚子　1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学』法政大学出版局

金武正紀・宮城利旭・比嘉春美・天順武雄　1980『宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚　発掘調査報告』沖縄県具志川市教育委員会

仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充　2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第25号　pp.59～79　読谷村立歴史民俗資料館

岸本義彦　1983「沖縄出土の弥生土器瞥見〔Ⅰ〕」『南島考古』第8号沖縄考古学会　pp.19～41

久保田昭二・辻明啓　2009『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

相美伊久雄　2004「「成川式土器」の器種組成について（予察）－杯形土器の様相を中心に－」『縄文の森から』第２号 pp. 29～36　鹿児島県立埋蔵文化財センター

島袋洋・金城亀信・上原静・島袋春美・金子浩昌　1996『平屋敷トウバル遺跡』沖縄県教育委員会文化課

下山　覚　1995「考古学からみた隼人の生活－「隼人」問題と展望－」新川登亀男編『西海と南島の生活・文化』pp.169～199頁　名著出版

新里貴之　2000「九州・南西諸島における弥生時代・並行期の土器移動について－基礎作業－」『大河』第７号　pp.237～257　大河同人

新里貴之　2001「物流ネットワークの一側面南西諸島の弥生系遺物を素材として－」『南島考古』第20号　pp.49～66　沖縄考古学会

多々良友博　1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号　pp.89～116　鹿児島県考古学会

橿　佳克　2011「土師器の編年　①九州」『古墳時代の考古学』１　古墳時代史の枠組み　pp.57～67　同成社

徳田有希乃・石堂和博　2009『植松遺跡・一ノ坪遺跡・高田遺跡・真所汐入Ｂ遺跡・有鹿野遺跡・下有鹿野遺跡・日ノ丸遺跡』南種子町教育委員会

中園聡　2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器計様式の同定と解釈－」『琉球・東アジアの人と文化一高宮廣衛先生古稀記念論集－』（上）　pp.111～130　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号　pp.57～76　鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村直子　1999「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション－南九州の土器をメディアとして－」『新しい関係性を求めて －コミュニケーションの諸相－』鹿児島大学教育研究学内特別経費全学プロジェクト報告書№１　pp.63～71　鹿児島大学

中村直子　2002「薩摩・大隅」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』pp.175～200　九州前方後円墳研究会

中村直子　2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めて「コミュニケーションのかたち－ことば・もの・メディア－」』pp.47-62　鹿児島大学

中村直子・新里貴之　2005『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』19　鹿児島大学埋蔵文化財調査室

中村直子　2009「南九州における木製品模倣土器について」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集　pp.59～67　佐田茂先生論文集刊行会

中村直子　2009「７・８世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考』中巻 pp.119～128　南九州縄文研究会

中山清美・高宮広土・樋泉岳二・黒住耐二　2005『安良川遺跡』笠利町教育委員会

平田信芳　1979「隼人が用いた土器－成川式土器－」『隼人文化』第５号　pp.34～44　隼人研究会

南種子町教育委員会　2007『廣田遺跡』南種子町教育委員会

宮城弘樹・安座間充　2002「沖縄者島における弥生時代並行期の土器」『沖縄諸島の弥生時代並行期』pp.1～23　沖縄考古学会

盛園尚孝・橋口達也・中橋孝博　1996『種子島　鳥ノ峯遺跡』　中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団

森貞次郎　1966「弥生文化の発展と地域性－九州－」『日本の考古学』Ⅲ　河出書房新社

吉本正典　1987「「幅広突帯」を有する壺形土器の研究」『鹿大考古』第６号　pp.43～56　鹿児島大学法文学部考古学研究室

吉本正典　2006「７世紀の列島南西域」『Archaeology from the South』pp.161～177　鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会